
この世界に

瀬川愛以

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この世界に

【Z-ノード】

N1815F

【作者名】

瀬川愛以

【あらすじ】

わたしは、君と出会って、すぐく変わった。

「この世界に、海と陸の割合が七対三。
わたしの頭のなかも、いつも、わたしのこのよつときのこのじばか
り。」

「向井さん、あなた、その成績じゃここは無理よ」

担任の西野先生が高校のパンフレットを机の上に置いた。ばさり
と音がしたのは、先生はあきれてくるのよ、といいたかったのかも
しれなかつた。

さすがに無理なのかもしれなかつた。

わたし、向井陸は、頭が悪かつた。中間試験の点数もだれにもいつ
てなかつた。

友達は、みんな頭がよかつた。

「やだ、全然だめだよー」

といえるのは、実際はだめではないからだつた。わたしは一回も
そんなこといえなかつたし、いわなかつた。

わたしは海が見える道を静かに帰つた。夕焼けが海に近づいてき
ている。
海星高校に行きたかったのにな。わたしのため息がひとつ浮かん
だ。

この街は、海沿いにある。港町らしい青い空と潮の香りが広がつ
ている平和な街。

海星高校は、海が見えるゆるやかな坂のつねにある。

あたしはコンクリートの上に座つた。

波と風がおしよせるこの場所に来ると、頭のなかがからつぽにな

る感じがする。

倉田先輩、元気にしてるかな。

倉田知先輩は、わたしのふたつ上で、今高校一年生。わたしが一年生のとき、倉田先輩が三年生で、委員会がいつもになつた。

体育祭で、倉田先輩の走っている姿はすばやくかつてよかつた。

足が速くて、背が高くて、かつてこの倉田先輩。

話したことはなかつたし、おそらく倉田先輩にとつては知り合いにもなつてないと思つけど、わたしはあの日からずっと倉田先輩を見ていた。

先輩が卒業するときにも、なにかできたわけじゃなかつた。

それから、先輩が海星高校に行つたと風のうわさで聞いた。その日から、わたしは海星高校を日指すよつになつた。

ため息がもうひとつ浮かんだ。

「あーあ」

口に出したらもつと、あーあ、とこう気持ちになつた。

白いセーラー服は、夕日をうけてオレンジに光つているよつに見える。

秋のはじまりは、憂鬱になる。

わたしは今クロークの上に立ち上がつた。それから何歩か歩いてみた。

なにも変わらないとはわかつてゐる。

わたしは海の方をむいた。ぼーっとしていたら落ちやう。

もう、こゝのじと、このまま、ここで、死んでおつかひ

。

「向井」

我にかかると、名前を呼ばれたような気がした。振り返ると、自転車に乗ったたしか違うクラスの少年がこっちを見ていた。本当に死ぬと思われたかも、と不安になつたけど、落ち着いて地面に下りることができた。

「なに」

「そつちこや、なにしてんの」

わたしは思わずうつとこいつになつた。自殺ではないけれど。

「べつに」

わたしはそっぽをむいた。なれなれしく話しかけてくる男の人があきらいだから。

「向井の下の名前、陸つていうんだ」

わたしはびっくりしておどろいた顔をしてしまつた。でも、かばんに名札がくつついているのに気がついて後悔した。

「そうよ。だからな」

なんでわたしはこんなにほんとした態度をとつているんだとはたと思つたけれど、べつにいいかとも思つた。

自転車の少年は小さくあ、そといったかと思うと自転車に乗つて行つてしまつた。べつに、行つてほしくないわけではなかつたけど。

それからしばらく海を見ていた。

「向井」

なんだと思つたらまたあの少年だつた。

「なによ」

わたしはしつこいなあ、と思いながらついた。答えるのも面倒になつていた。

「なんで、海見てんの」

「なんで、つて海が好きだからよ」

わたしがそういうと、少年は首に手をまわして赤くなりながら海を見た。

「あの、さあ、

少年がその姿勢のままいった。わたしは適当な顔をしていたと思つ。

「おれ、春日海、

なんで自己紹介をしてくるんだと思つたけど、とうあえず聞いていた。

「おれ、向井のひと、陸つて呼ぶから、おまえもおれのこと、海つて呼べよ」

わたしは、ああ、はいはいと聞いていたが、途中で頭がまわつた。

「はあ？ なんでよ、やだ」

わたしは少年 春日海にかみついた。春日海はちよつと笑つていた。

春日海は、陸、また明日といこながら自転車に乗つて去つていた。

わたしはなんだか疲れていたので、ふたたびコンクリートに座つた。ため息がまたひとつ浮かんだ。

もう帰る。疲れた。帰つたらすぐ寝る。ひとりで宣言し終わつたところで立ち上がつた。

しばら歩いていると、今さつき見たような箇中があつた。

「陸」

無視しようがんばつてこたナビ思わず顔をむけてしまつた。

「乗つてく？」

春日海は自転車の後ろを指さした。

「乗らない！ それに、ふたり乗りは、禁止なんだからね！」

わたしはむきになつて大声で叫んだ。そのまま早足で歩きだした。

春日海がにやにやしているような気がして、もつと早足で歩いた。

春日海、か。

わたしはさつき、海が好きだといつたことを思いだして、しまつたと思って、走つた。

なんだか毎日がしんどい、と感じはじめたのは、たしか十月あたりだった。

「ねえ、亜夜子、春日海つてしつてる?
わたしは亜夜子を見上げていった。」

「しつてるよ。つか、おなじ小学校だったし」

亜夜子は計算機の上で指をすばやく動かしながらいった。亜夜子のめがねから見える田はまつすぐに机の上の書類をとりえて、まばたきすらしていないように見える。

川島亜夜子は、計算が好きなのだ。

あまりの計算好きで、ほんとなら絶対に計算などしないはずの数字まで、かたつぱしからたして、ひいて、かけて、わる作業をやつていないと落ちつかないみたい。

彼女の計算機は、まるで携帯電話のようになつた赤で、亜夜子のめがねとおそりだ。千円以上したといつていた。
もちろん、その千円も亜夜子のおごづかいからひかれて、そのあともいろいろな計算に登場していたんだね。う。
結局、亜夜子とはずっと同級生してたつてことになる。

「なに? 春日海がどうかしたの?」

亜夜子はひと仕事終わったのか、じつちに顔と体をむけた。めがねの奥の目がわたしをはつきり見ている。

「いや、べつにその、どうつてわけでも、ないんだけじゃ? わたしはなんだかも「も」しながらいった。その様はもつと幼稚園児みたいだったと思う。」

亜夜子はそのままの姿勢でぴくりとも動かなかつた。わたしの田はあちこちを泳ぐのでいそがしかつた。

「「つむ。 なんかあるでしょ」

亜夜子からは逃げられないと思つた。

「告白、しあやつた」

亜夜子はわたしの田を逃がさなかつたが、はじかれたよつて口を開いた。

「ちょっと待つて。 なにそれ、ほんと?」

「いや、だからね。 こないだ、帰りに会つて、なにしてんのつていわれたから、海が好きだから海見てるつていつちやつて、そいつが海なんて名前だなんて知らなかつたから、だから、その……」

亜夜子はぱつとふきだした。

「なにそれ、うける。 向井ほんと天然だね。 いわれない?」

「ねえ、いいかげん陸つて呼んでよ。 よそよそしいよ」

「いいじゃん、べつに。 もう慣れちゃつた」

セツコ「ひこひこぬうひこ」、元気けむりうどしていた。

「でも、いいよね。 かすがうみなんて、男なのにかわいい名前でさ」
わたしはため息といつしょにしゃべつた。

「あの人、まえアメリカに住んでてよ。 小三のとき、転校してきた」
亜夜子は授業が終わつてもなお計算機と格闘している。 いや、むしろ遊んでいるのか。

「ふうん……」

「どうか。 ジゃあ、英語が得意なんだろうな。 わたしがじばらく書けなかつたアルファベットと、昔から遊んでいたんだ。」

三年生の秋はいそがしいな。

毎日がめぐるなかにわたしひとりとり残されてる感じ。

帰るときの気持ちはすごくセンチメンタルだ。 異常にものがなし、風がすべて奪い去つていくよ。

「つぐー」

わたしは振り向いた。自転車をすり抜いたやつが「ひむかつてくれる。

「ああ、やっぱり陸じやん、なんで返事しないの」

なんとなくわかつてはいたが、春日海だった。

なんだか、もやもやする。元気な人とは話したくない気分なんだよね。

「なに？ 元気ねーじゃん」

なんだかイライラしてきた。なんでこんなに的一天気なんだろ？、こいつ。わたしが意味のわからないことでなやんでいるのに。

「わたし、いろいろつかれでんの。あんたと話して元気ないの。わかる？ てか、何の用なわけ？」

「そうだよ。春日海なんてふわふわした名前のやつと話すこともないはずだよ。むかむかしてきた。」

「なに、こりこりって？」

「たとえば……」

なんだか急にセンチメンタルがもどってきた。海の上で波がゆれている。生まれては消える、はかないもの。

消えるために生まれてきたのかのように。

人がいつかは灰になつていいくよ。

この世界に、絶対なんてないんだ。

倉田先輩。海星高校。亜夜子。波。わたしのあこがれるものはたくさんある。

たとえ、かなわなくとも、願うのは自由だ。

もしかしたら、倉田先輩が、わたしのことを覚えていてくれるかも、とか。

たとえ、かなわなくとも

。

「たとえば……」

あ。

あ、泣きそう。

どうしよ。

「わたし、その……好きな人がいるの」
わたしはコンクリートの上に座った。泣きそうなのを「まかすの」
には話すしかないと思つた。

春日海も予想してはいたけど、となりに座つた。

「一年上の先輩。委員会がいっしょになつたの、一年まえ。いまは、
海星高校に行つてる。でも、あそこ、レベル高いから。わたし、頭
悪いのよね。なんか、ゆううつ。ため息ばっかり」

春日海がわたしの顔を見た。わたしの目は波だけを見ていた。あ
ごとひざをくつつけて。

夕陽が波に消えていく。今日は、あっちこむかつて終わる。

春日海が立ちあがつた。わたしは思わず彼の顔を見上げた。

「陸、しあわせ？」

わたしの口が少しづつ開いていく。

わたし、しあわせ？

わたしは黙つて首をふつた。灰色の地面しか目に映らなかつた。

「それ、恋？」

わたしの頭が真つ白になつた。

「しあわせじゃないのって、恋なの？」

わたしは動けなかつた。春日海は自転車に乗つて行つてしまつた。

わたしはひとり、波の音をきいていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1815f/>

この世界に

2010年11月20日02時52分発行